

2025.4.27.

「聖霊の導きによって歩む」

旧約 民数記 9章 15～23節

新約 ガラテヤの信徒への手紙 5章16～26節

1. はじめに

今日は礼拝後に、2025年度の定期教会総会があります。定期教会総会がある主の日の礼拝においては、その年の教会標語について御言葉を受けることになっています。今年の教会標語は週報の表紙に記されておりますようにガラテヤの信徒への手紙5章16節「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」です。特に「霊の導きに従って歩みなさい。」との御言葉を受けていきます。

この教会標語は私が4月1日に着任する前に、当教会の長老会から依頼を受けまして、前任地で最後の奉仕を続けていた2月に与えられたものです。四人の長老達以外の教会員の方とは会ったことも無いわけでしたが、特に五里霧中の中、どの御言葉しようかと困り果て、悩んだ末に選んだということはありません。お会いしたことはなくても、共に同じ父・子・聖霊なる神様を信じ歩んでいる主にある兄弟姉妹ですから、牧師が替わろうとも聖霊の導きの中で共に歩んで行く営みに変わりがあるはずがないからです。ただ、今年は教会の伝道100年という記念すべき年ということですが、さすがに100周年記念事業をどのようにするかということについては、4月に着任してから皆さんと話し合いながら決めていくしかありません。その営みも含めて「聖霊の導きによって歩む」としました。

2. 雲の柱に導かれ

「聖霊の導きによって歩む」というこの御言葉に対して、私は一つのイメージを持っています。それは出エジプトの旅です。これは私のイメージと言うよりも、出エジプト以来、神の民が3千年以上にわたって持ち続けてきたイメージです。神の民は、神の民イスラエルが生まれた出エジプトの旅に重ねるようにして、自分自身の、或いは自分たちの群の地上での歩みを受け止めてきました。この出エジプトの40年の旅において、様々な出来事をイスラエルは経験してきましたけれど、今朝、私共が心に留めたいことは、イスラエルの民は雲の柱によって導かれて歩み続けたということです。

雲の柱が聖書に最初に出てくるのは、出エジプト記の13章21.22節です。イスラエルの民が

モーセに率いられてエジプトを脱出した直後、彼らは海沿いの道「ベリシテ街道」を通らずに、葦の海に通じる荒れ野に導かれました。この時のことを聖書はこう記しています。「**13:21** 主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。 **13:22** 昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった。」このようにしてエジプトを脱出したイスラエルの民でしたが、当時、世界最強と言われたエジプト軍がイスラエルの民を追いかけ、追いつき、そして追い詰めます。前は海、後ろはエジプト軍。もう絶体絶命というピンチです。この時、あの有名な海が二つに分かれるという奇跡が起きました。そして、エジプト軍がイスラエルに近づくことが出来ないように、雲の柱がエジプト軍とイスラエル間に割って入ります。真っ黒な雲が立ちこめ、エジプト軍はイスラエルに近づくことさえ出来ませんでした。イスラエルは神様が造ってくださった道を通して逃げていくことが出来ました。こうして、イスラエルの民は最大のピンチを逃れることが出来たわけです。そして、その後続く長い荒野の旅においても、イスラエルは雲の柱、火の柱と共に旅を続けました。

今朝与えられ民数記 9 章 15 節以下にはこうあります。「**9:15** 幕屋を建てた日（幕屋というのは神様が御臨在され、そこで神様はモーセに言葉を与え、指示を与えました。そして、人々はそのに向かって礼拝しました。この幕屋が後に神殿となります。）、雲は掟の天幕（十戒を記した契約の板の入れてある箱が納められていましたので、幕屋はこうも呼ばれていました。）である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上にあつて、朝まで燃える火のように見えた。 **9:16** いつもこのようであつて、雲は幕屋を覆い、夜は燃える火のように見えた。 **9:17** この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。」これが出エジプトの旅の間中、イスラエルの民が続けた旅の仕方でした。イスラエルは自分で旅の計画を立てて、それに従って出エジプトの旅をしたではありません。雲の柱が移動すれば旅立ち、雲の柱が留まればそこに宿営しました。それが何日続こうともそうしました。この雲の柱、火の柱に導かれた歩みこそ、私共と共にいてくださる神様、聖霊なる神様に導かれて歩む神の民の姿と考えて良いでしょう。

3. 神の民の目的地

このエジプトを脱出したイスラエルの民には、目的地がありました。それが約束の地です。40年後、イスラエルはヨルダン川を渡り、その約束の地に入りました。その時、イスラエルの民をずっと導いてきたモーセはその直前に神様の御許に召されました（申命記 34 章）。モーセは自分の後継者であるヨシュアに全てを託し、ヨシュアに率いられたイスラエルの民がヨルダン川を渡って約束の地に入りました。このヘブライ語名のヨシュアがギリシャ語読みされますとイエスと

なります。これは偶然ではありません。旧約において約束の地に導いたのはヨシュアでしたが、私共を救いの完成、天の御国という約束の地に導いてくれるのはイエス様だということです。イエス様が導いてくださる約束の地。それが神の国、御国です。神の民はそこに向かって、そこを目指して、この地上の歩みを為していきます。私共には目的地があります。私共の人生は、漫然と時間だけが過ぎていく、その様なものではありません。明確に神様、イエス様が約束して下さった目的地を目指して一日一日歩んで行く。それが神の民とされた私共の歩みです。

4. 聖霊の導き

では、「聖霊の導き」とは、どのようにして私共に与えられるのでしょうか。出エジプトの旅の時のように、雲の柱が導いてくれるのであれば、つまり誰にでも分かるように見える形で聖霊なる神様が導いてくださるのでしたら、何も考える必要はありません。しかし、実際にはそのように誰にでも分かるようなあり方で導いてくださることの方が希でしょう。だったら、聖霊なる神様の導きは分からないのでしょうか？いいえ、分かります。それは、雲の柱が幕屋と共にあったということに注目しなければなりません。幕屋というのは、テントのような簡易式の移動出来る聖所ですけれど、ここでモーセは神様の御臨在に触れ、御言葉を与えられました。モーセはそれをイスラエルに伝えました。そのような神様の神の民に対する導き方は、今も変わりません。神様は御言葉を与えるというあり方で、主の日の礼拝のたびごとに私共に臨んでくださり、導いてくださっています。つまり、聖霊なる神様の導きは「御言葉によって」与えられているということです。ですから、「聖霊の導きによって歩む」とは、「御言葉によって歩む」ということです。この御言葉によって、私共には信仰が与えられ、信仰が養われるわけですから、それは「信仰によって歩む」と言っても良いでしょう。

しかし、聖霊なる神様の導きとは、それだけではありません。様々な出来事をもって「私はここにいます。私はあなたを愛している。私はあなたのために道を用意した。私はあなたを選んだ。」といった様々な御心を示してくださることもあります。その時、この神様の促しというものに従わなければ、「聖霊の導きによって歩む」ことにはなりません。この促しに従って行く信仰が私共には求められます。私共の信仰は、単に信仰告白に言い表された信仰を信じるというだけではなくて、具体的な生活の中で、聖霊なる神様が与えてくださる促しに従って行くということが不可欠です。

聖霊なる神様は、実に御言葉と出来事をもって、私共を導いてくださいます。それは、「私に告げられ、私に示される」という時もあるでしょうし、「教会全体に告げられ、示される」こともあるでしょう。神様は自由な方ですから、「神様はこういう時に、こういうあり方で、このように私共に御心を示しされる」とは言えません。ただ、ここに集われている皆さんの多くは、こ

のことについて今更説明する必要は無いだろうと思います。皆さんは、その様な聖霊なる神様の促しに従って洗礼を受け、そしてご奉仕をされ、今まで歩いてこられたのでしょうか。大切なことは、この聖霊なる神様の促しを、聖霊なる神様の促しとしてきちんと受け止めることです。

5. 聖霊の導きに囲まれている

私はこの「聖霊なる神様の働き」「聖霊なる神様の促し」というものが、随分長い間ピンときていないところがありました。確かに、私は説教の中で明確に自分の罪を示され、イエス様の赦しがるようにして洗礼を受けました。20歳の時です。その後、青年会の活動や教会学校の教師やクリスマスの準備やら、良く奉仕をしました。今思えば、真面目で熱心な、理想的な青年キリスト者だったかもしれません。その頃、一緒に青年会で活動していた一人が、現在の日本基督教団総会議長の雲然俊美牧師です。私と同じ年でしたが、彼は神学生でした。しかし、この頃の私は「聖霊なる神様のお働き」というものが、よく分かりませんでした。その後、会社を辞めて献身するのですが、その時も大きな出来事がありました。神様は確かに御言葉と出来事をもって私を導いてくださっていました。それでも、なお私は「聖霊なる神様の働き」というものがピンときていませんでした。それは、聖霊なる神様の促し、導きというものを、全て自分の信仰的な真面目さ、熱心さによるものだと思っていたからです。今思えば、全く愚かなことであり、傲慢なことでしたけれども、その当時はいつでも「神様が」ではなく、「自分が」「自分が」と思っていました。例えば、こういうことです。毎週の礼拝に集うのも自分が頑張っているからだと思ったり、毎日お祈りするのも自分が真面目だからと思ったり、奉仕をするにしても自分が頑張らなきゃと思っていました。しかし、それらは全て聖霊なる神様が整えてくださり、そのように導いてくださっていたからなんですけれども、それがよく分からなかった。信仰によって歩んでいるのではなく、自分の熱心や真面目さによって歩んでいたわけです。そして、この真面目さや熱心さが信仰だと思っていました。

しかし、少しずつ、少しずつ、神様は信仰による気付きを与えてくださいました。これも聖霊なる神様のお働きによるものですが、この聖霊なる神様の御業に気付き始めますと、聖霊なる神様は私共が何か大きな決断をしたり、道を選んだりする時にだけ働いておられるのではなくて、いつでも、どこでも、私に働きかけてくださり、御国への道を健やかに歩いていくようにと導いてくださっている。そのことに気付いていきます。毎日の祈ることにおいて、礼拝を守ることににおいて、日々の賛美において、説教の備えにおいて、様々な奉仕において、人との出会いにおいて、聖霊なる神様は働いてくださっている。皆さんとこうしてお会い出来たのも、聖霊なる神様のお導きです。私共は、実に聖霊なる神様の御業に囲まれて生かされている。その当たり前のことに気付くようになってまいりました。そうしますと、自然と神様への感謝が生まれてきます。賛美

が口に出るようになってきました。ありがたいことです。

6. 霊と肉との対立の中で

ここで使徒パウロは、この聖霊なる神様の導きの中で歩む時、私共の中に戦いが起きると告げます。それは聖霊の導きに従うか、肉の思い（パウロが肉という言葉使う時は罪という言葉とほとんど同じ意味に用いています）に従うか。この対立、戦いが自分の中で起きると言うのです。私共は信仰が強められていけば、その様な戦いは無くなり、いつでも聖霊なる神様の導きに従っていける者になる。そして、心はいつも平安で満たされる。その様に考えがちですが、そんな事は全くありません。そのようになるのは神様の救いの御業が完成した時、神の国においてです。しかし、この地上にあっては、私共のこの戦いは最後まで続きます。勿論、この罪との戦いは、どんどん戦う場が変わっていきます。主の日の礼拝を守るということ自体が中々の戦いですが、それはすぐに習慣になって、戦うほどのことではなくなっていくでしょう。しかし、次の戦いが始まります。それは、世代によっても変わっていくでしょうし、置かれた立場・状況によっても変わっていくでしょう。

7. 肉の業のリスト

パウロはここで二つのリストを挙げています。一つは「肉の業（つまり罪の業）のリスト」、もう一つは「聖霊の結ぶ実のリスト」です。今朝は、この二つのリストについて丁寧に見ていく時間はありません。ざっと見ますと、この悪のリスト、罪のリストは、勿論これが全てではありません。数え上げれば切りがありませんが、ここに挙げられているものは幾つかのグループに分けることができます。

第一に、性的な罪です。キリスト教は性倫理には厳しいのです。十戒の第七の戒めに「姦淫してはならない」があります。これは第六の戒めてある殺人を禁じる次の戒めです。それは、神様が与えてくださった愛の秩序としての結婚を重んじ、夫婦の交わりを大切にしているからです。性による罪は、食欲や睡眠欲と違い、相手がいます。姦淫は、人格的・霊的殺人と言っても良いでしょう。このような裏切りの上に愛は成立しません。

第二に、偶像礼拝です。性的な罪と並んで神様が最も嫌われるものが偶像礼拝です。これは神様のとの愛の交わりを裏切ることだからです。多神教の文化土壌にある日本では、これを真剣に受け取れないところがあります。しかし、聖書の神様は唯独りの天地を造られた神様であり、私どもと愛の交わりを作りたい、その為にイエス様をお与えになってくださったお方です。他の神様を拝むということは、姦淫の罪と同じであり、神様の愛に対しての裏切りです。偶像礼拝も魔術も自分が得をするためなら、神様であろうと悪魔であろうと何でも良い。

このあり方が問題なのです。私共は神様を畏れ敬い、神様との間に愛の交わりに生る。それが聖書が教える信仰です。

第三に、対人関係です。敵意・争い・そねみ・怒り・利己心・不和・仲間争い・ねたみが挙げられています。私共が生きていく上で、この対人関係におけるトラブルは本当に辛いものですが、このような問題を全く抱えていない人もいないでしょう。しかし、ここにおいてこそ「愛」が問われるのです。仕え合おうとする志が問われるわけです。

第四に、生活面、特にお酒です。これは禁酒を勧めているわけではありません。しかし、ほどほどにということです。依存症になるような、我を忘れるような飲み方はいけません。酒に支配されてしまうからです。薬物も同じです。大切なことは、私共はお酒を飲んでもキリスト者であるということです。

8. 聖霊の実のリスト

次に「霊の結ぶ実」ですが、第一に挙げられているのは「愛」(22 節)です。神様を愛し、隣人を愛する者へと導かれたのがキリスト者です。神の子とされ、神様を父と呼ぶことが出来る神様との愛の交わりを与えられたキリスト者は、隣り人を愛する者とされました。この愛の具体的な展開として「喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、5:23 柔和、節制」があります。神様との愛の交わりに生きる中で、隣り人との交わりもまた変えられていきます。勿論、私共が隣りに罪を犯さなくなるということではありません。しかし、私共は自らの罪を知らされ、これと戦うことを知らされた者です。霊の結ぶ実を「求める」ということ自体、私共が聖霊なる神様の導きの中にある、神の国に生き始めている確かな「しるし」です。しかし、なお私共は弱く、愚かで、肉の思い・罪の思いがふつふつと湧き上がってきます。これと戦い、これを退け、私共は御国への旅を続けていきます。その為には、どうしても聖霊なる神様に助けていただかなければなりません。祈りが必要になってきます。

9. キリストのものとなった私共

最後に 24 節を見て終わります。キリスト者とは「キリスト・イエスのもの」となりました。つまり、自分の人生の主人がイエス様になりました。私共は神様の子とされましたけれど、同時に神様の僕とされました。この二つは分けることは出来ません。神様に召し出され、十字架の救いに与った私共は、その恵みに応えて生きる者となりました。十字架の救いに与った者は、イエス様の十字架を無駄にすることは出来ません。もし、私共が欲情や欲望に引きずられたままで生きるのならば、それはイエス様の十字架を無駄にすることになってしまうでしょう。イエス様の救いに与った者は、このイエス様の十字架の前に立ち続けます。十字架の前に立ち続

けるけるというのは、ただぼ一つと十字架を見上げるということではありません。この十字架は「私のための」十字架であることを知らされ、イエス様の御前に感謝をもって悔い改めるといことです。それがここで言われている、自らの肉（=罪）を十字架にお架かりになられたイエス様と共に十字架に架けるということです。キリスト者は、キリスト共に葬られ、キリスト共に甦りました。信仰において私共はキリストと一つにされました。このイエス様との深い愛の交わりに生きる者とされて、その愛の中に生きる。

聖霊の導きによって生きる私共は、聖霊の導きに従って御国に向かって歩いて行きます。ここでキリスト者は一人で歩いていないということが大切です。キリストの体である教会の一員として、隊列を組んで歩いていきます。神様との間に与えられた愛の交わりは、キリスト者同士の愛の交わりを形成していきます。

その具体的な交わりの中で「うぬぼれ」「挑み合う」「ねたみ合う」という肉の業が、しばしば表面化します。それは、イエス様の弟子達も「誰が一番偉いのか」とイエス様に問うたと（マルコ 9:33-37）ということにも現れています。それは私共に「仕える」ということが中々身に付かないからです。イエス様の歩みは、徹底的に仕える者としての歩みでした。それ故、私共にとって価値のあることは「仕えられる」ことではなくて、「仕える」こととなりました。この歩みを私共の罪もサタンも邪魔しようとしみます。まるで自分が偉い者であるかのように思い違いさせるのです。そして、ねたみが生まれ、挑み合いが起きます。こんなことは止めましようとパウロは告げます。本当にそうです。

聖霊なる神様の導きの中、神様の愛を受け、神様の愛に生き、心をつにして、神様の救いの御業に共に仕えてまいりたいと心から願うものです。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、私共に御言葉を与え、あなた様の御心に従って歩いて行くようにと促してくださいました。その促しに従って、私共が互いに愛し合い、支え合い、仕え合う者として歩いていきますように。聖霊なる神様による恵みに囲まれて、一日一日生かされている私共です。どうか、私共の唇に、あなた様への感謝と賛美と祈りを備えてってください。私共があなた様の恵みと力と真実を証する者として、存分に用いてってください。この教会がキリストの御臨在を証する群として建てあげられていきますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン